

本場のウィーンでも認められた「こどものためのオペラ劇場」が今年も開演。

2004年の初公演以来、年々人気を増している新国立劇場の「こどものためのオペラ劇場」。今年も子どもたちの夏休みの楽しみのひとつになりつつある。今年もまた新国立劇場では多くの子どもたちの歓声がこだました。

子ども向けのアレンジを施しながらも、本物志向の舞台。

2008年7月25日から3日間、新国立劇場では恒例となった「こどものためのオペラ劇場」が開催された。今年

の演目はワーグナーの「ニーベルングの指環」を子ども用にアレンジした「ジークフリートの冒険～指環をとりもどせ」だ。

通常、オペラといえば観覧料が高額になるのだが、この公演は子どもたちに幼いうちから本物の芸術に親しんでもらうことを目的としてお

り、2100円という低料金設定になっている。

同劇場を運営する財団法人 新国立劇場運営財団 支援業務室の前田秀文さんは「子ども向けの演出を施していますし、時間的にも短いのですが、出演者もスタッフも超一流です」と説明する。確かにメンバーを見ても、日本を代表するスタッフとキャストが並んでいる。この演目は2004年の初演時と同じ物だというのが、いくつかの点でバージョンアップしている。これまでエレクトーンを使用していたのをやめて、オーケストラのみの編成とした。生の演奏の臨場感がさらに増



当日配布されたプログラム



子ども用にアレンジされたが内容は超一流

えたことになる。また、フィナーレの楽曲も原曲に近い編曲にするなどの工夫を凝らしている。

オープニングはまずロボットが前振りとして登場。普通のオペラではありえない子ども向けの演出から始まった。ロボットが子どもたちに話しかける。「みんなあ。この指環はとても大切なものなんだよ。でも僕は忙しいから、悪いやつらにもっていかれないように、みんなが見張っていてくれる？」

これだけで、もう子どもたちは舞台に引き込まれていく。映像ではありえないライブならではの演出だ。



歌声のすばらしさに思わずひきこまれていく



本場ウィーンに逆輸入されたほどのできばえだった

子どもたちの目と耳を釘付けにした面白さ。

この舞台、実はその芸術性が認められて、2007年11月にはオーストリアのウィーン国立歌劇場で上演されてもいる。公演初日には大絶賛を博し、チケット入手が困難なほどの人気だったという。

日本でも同様で、公演は3日間、1日に2回の公演は全て売り切れて人気のほどを証明した。

なにしろ、指揮も担当した三澤洋史の編曲は作品を見事に表現し、マティアス・フォン・シュテークマンによる演出は、リズムカルで小気味よい。東京フィルハーモニー交響楽団のメンバーによるアンサンブルの演奏は重厚感をもちながらも軽快で、歌はとてわかりやすい。子どもたちが釘付けになったのも無理はないだろう。

「実は子どものためのオペラというものは世界のどこを探

助成団体
財団法人 新国立劇場運営財団

<http://www.nntt.jac.go.jp/>

担当者より



おかげさまで
夏休みの定例イベントに
成長しました。

財団法人 新国立劇場運営財団
支援業務室
前田秀文さん

子どもたちに本物のよさを知っていただくため、舞台の品質にはこだわりたいと考えています。コスト的には妥協はできませんので、自己資金ではまかないきれず、AJOSCの助成には感謝の言葉もありません。子どもたちが豊かな人間に育つための一助になるよう、これからも力を尽くしてまいりますのでご支援をよろしくお願い申し上げます。

スタッフ

- 【芸術監督】若杉弘
- 【編曲・指揮】三澤洋史
- 【台本・演出】マティアス・フォン・シュテークマン
- 【美術】堀尾幸男
- 【衣裳】ひびのこづえ
- 【照明】磯野陸
- 【音響】土肥昌史

しても、稀少です。だからこのオペラは新しい分野を開拓したともいえるんです」と前田さん。

観劇した子どもたちの声を紹介すると、

「日本語でよくわかった。とても楽しかった。舞台や衣裳もきれいで、歌もとても良かったです。こんどは、ワルキューレを観たいです」(12歳男子)

「最初のロボットも楽しかったし、悪者も楽しかった、小鳥がよかった。最後、観客席に降りてきてくれてとても楽しかったし、観に来て良かったと思いました」(11歳女子)

異口同音に楽しかった、もっと観たいという声が多く寄せられた。新国立劇場では、今年は劇場内を巡るスタンブラリーを行うなどの工夫も凝らしている。

2009年も同じ演目で「こどものためのオペラ劇場」が行われる。人気も効果も大きく、止めるわけにはいかないと考えている。